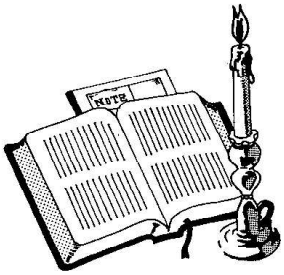


フライデイナイトセミナー
「聖書理解のためのガイドブック」

第３回　　第１章「聖書の目的」
（３）「救いの書としての聖書(１)」

テモテへの第２の手紙　第３章１４～１７節

3:14　しかし、あなたは、自分が学んで確信しているところに、いつもとどまっていなさい。あなたは、それをだれから学んだか知っており、
3:15　また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている。
3:16　聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。
3:17　それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になるのである。

救いとは一般的に、「助けを必要としている人を助けてあげること」と考えられています。例えば、溺れている人を助けてあげたり、落第しそうな人を進級できるように援助する、ということです。また、宗教的意味ではもっと内面的意味として使われ、「現在、不幸とか悲惨と考えられているものからの救出」を意味するのがほとんどです。

しかし、聖書が教えている「救い」というのは、それらの根源を問題にし、その解決をはかろうとするものです。さらに、救いとは自由を意味し、新しい造りかえのことであり、究極的にはこの宇宙の新しい造りかえを意味します。聖書は､救いという現実の体験を得させる知識を与えるために書かれています。

ここでは、次の３つの「聖書が与えていない目的」を明らかにすることによって、聖書の目的をより鮮明にしていきます。

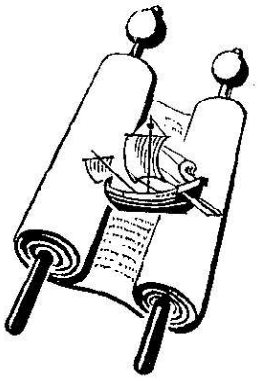
１．聖書と科学

まず、聖書の目的は科学を教えることではありません。聖書と科学が矛盾するということではなく、聖書には科学的記述が全然ないということでもありません。聖書は科学に関連した事実も含むが、それが目的ではありません。

・科学的主題と宗教的主題

・啓示と経験

２．聖書と文学



聖書の中には文学として優れている書もあります。また、その訳文が大変素晴らしいので、その国の文化的遺産となっているところもあります。

しかし、よく調べてみると、新約聖書のほとんどが「コイネー」と呼ばれる、当時のギリシャ語の中でも市場や事務所で用いられる日常会話の言葉で書かれているので、文学として洗練されているわけではなく、文法的にも正確さを欠くところがあります。聖書はメッセージを伝えようとしているのであって、美しい文章を残そうとしているのではないのです。

３．聖書と哲学

聖書は哲学的な問題への解答のために書かれているのでもありません。たとてば、人生の苦難と悪がなぜあるのか、ということを哲学は問いますが、聖書は必ずしも十分な解答と証明を与えているわけではありません。

・ヨブは自分の苦難の理由を知らされなかった。
・究極的な苦難と罪の起源については示されていない。

聖書はむしろ、私たちがどのように苦しみに耐え、また罪にうち勝つかを教えています。

聖書はわたしたちに救いを与える書です。